資料紹介

花袋「縁」中の一モデルの証言

清田啓子

今わたくしの手許に一冊の古びた本がある。表紙に補修のセロファンテープのあとが残る、田山花袋著「縁」の初版本である。

本書全体の紙はすつかり黄ばみ、所々にしみがあり、綴じ糸もすでにおぼつかなく、背表紙は縦二つに割れてしまっている。いわゆる古本の、ありふれた体裁をもつ物に過ぎないが、いささか趣きを異にするのは、本書の前半二百数十頁に亘って、上段の余白に細かいペン字の書きこみがあることである。

その内容は、「蒲団」「縁」に描かれた若い恋人たち――永代静雄と岡田美知代――の出会いから袂別までを、永代の友人であった中山三郎が、自身とのかかわりに於いて記述したもので、中山自身も「縁」中に登場するところから、思い出をこめて、また幾分の抗議を呈するために書きつけたものである。それは、前後二部に分かれ、前半は「蒲団」以前の事から永代の戦時中の死まで（昭和二十二年三月三日にこれを書き終えた旨もしるされている）、後半は、「蒲団」後日譚と題されて、余談的な六つの章から成る。その他、処々に内容に応じて、注釈的、あるいは抗議的な言句が記されている。

中山三郎は、蕗峰のペンネームで「蒲団」の件につき雑誌「新声」に一文を寄せたことがあり、それと、この書きこみとは重複するところもあるのであるが、永代夫妻の実像が具体的に描かれている点、作品に対してなにがしかの照射をもち得るかと考え、昨今庶民の証言ばやりの情勢に甘えて、活字に移しておくこととした。

その書きこみは、一頁十三行平均、ほとんどぶつつけ書きであるらしく、思い違いの訂正があったり、文章に熟さないものがあったりするが、明らかな誤字脱字以外は極力そのままにした。ただし内容により私意に省いたところもある。

この文章の発表を快諾された、嗣子中山八郎氏の御好意をしるして、感謝いたしたい。

田山花袋の、この「縁」とその前作「蒲団」と、更にその前に来る「生」とは、花袋が最も心血を注いだ三部作で、単に花袋の全生涯を通じての傑作であるのみならず、明治文壇に最も巨きな足跡を残した記憶すべき大作である。この三部作の第二部作たる「蒲団」は、明治の末葉に勃興した自然主義文学の最先駆を為すもので、それが藤村の「破戒」と期を同じうして世に出で、相共に当時の文壇を騒がせたこと夥しいものがあった。

この「縁」に出て来る馬橋と其の妻敏子こそは、「蒲団」に於ける事件の中心人物で、花袋をして所謂「中年の恋」に悶々たらしめた相思の若き男女で、馬橋は私の莫逆の友永代静雄君であり敏子は花袋の愛弟子岡田美知代女史である。二人の恋の最初の口火をつけたのは、或は私自身であったらうと思ふほど、此の事件にも、それから後の二人の生活にも、私との関係は頗る深い。而して「縁」も「生」もこの最初の事件を中心に把握しつゝ発展してゆく花袋の生活史であつて、ことに「縁」の中には私も顔を出して来るので、思ひ出が頗る深いのである。

㈠「蒲団」以前から「蒲団」の終まで

明治三十七年、といへば私の廿一歳の時の事であるが、たしか其の秋十月の事であつたと思ふ。日本組合基督教会の大会が京都で開かるゝといふので、神戸の組合教会から二三十人之に出席することになつた。

私はその前年の五月洗礼をうけ、間もなく勤めてゐた兵庫県庁を辞して、神戸教会の牧師原田助氏（後の同志社総長、大戦中ローマに派遣されて活躍した原田健公使の父）の家庭に住み込み、神戸教会の書記となつてゐたので、私も牧師に随行することとなり、第一日は丹波の亀岡に直行して、舟で保津川を下つた。両岸の絶壁を点綴する紅葉は少し見頃に早かつたが、奔流激湍を舟子の棹一本の綾で下つて行く壮快さは今にも忘れられない。その夜は嵐山の三軒茶屋に一泊して翌日京都に入つたが、その夜、神戸松陰女学校の婦人伝道師横山佐野子女史(後の中村正路牧師夫人)と共に、同志社に入学してゐた永代静雄君を訪問し、三人肩を並べて月明の相国寺畔を逍遙して親しく語り合つた。この永代君が、即ち「蒲団」にも「縁」にも主要の人物として描かれてゐる「馬橋」である。永代は私より二つ年下であるから、その時は十九歳であったが、天才的にませて大人ぶつた青年で、演説でも文章でも立派に熟して大人も及ばぬものがあつた。その時、何かの機会から、宗教問題から文学論に一転した時、永代は、

「現代は大に女性作家の起るべき時である」

といつて、何やら滔々と論じ立てた。私達はそれを傾聴し

て、墨の如く黒い松影と月光とを静かにふみつゝ歩を運んだが、私はそのあとで、

「君、神戸女学校の卒業生で、いま田山花袋の許に修業してゐる岡田美知代といふ女を知つてゐるかい」

といふと、永代は

「イヤ一向知らぬ」

と答へた。

「さうか、この頃大分あちこちの女性雑誌に書いてゐるやうだよ」

と云つたが、私もあまり委しいことは知らぬので、話は只それきりで打ちきられた。この岡田美知代こそは、「蒲団」の女主人公敏子であつて、事件はその一年後から発展して行つたのである。

その翌年の夏が来た。馬橋の永代は夏期休暇中神戸に帰つて基督教青年会の寄宿舎たる進修館に入つた。私は早速永代を訪ねて、一二時間語つたが、辞して帰らうとした時、永代は私を追つかけて出て、

「君、これを途中でポストに入れてくれ給へ」

といつて一封書を託した。私はそのまゝ懐ろにねぢこんで出たが、ポストへ入れる時、ふと見ると、それは豈計らん、敏子の岡田美知代に宛てた親展書であつた、而もそれが田山花袋の処ではなく、備後国上下町の自宅へのものであつた。

こゝで直ぐ直感したことは、奴さん、いつの間にか、投書雑誌の紙上で女の住所を知り、文通を始めたものだな、と思つたことである。それにしても去年の秋、私が初めて女の名前を知らせてやつてから、まだ一年足らずだ、さすがに多感の青年のやることだ、とは思つたものの、ことし二十歳の青年のやることにしては、マセたものだと、ひそかに其の勇気に感服せざるを得なかつた。

「蒲団」の問題はこの直後から起つたのである。無論それは私が後になつて知つたことであるが、筋はこうである——その夏、神戸の関西学院（今の関西大学）で、青年文学会の催しがあつた。嘗て之に在学してゐた永代は無論之に出席、何かの発表をやつたであらうが、私は丁度徴兵の問題で郷里に帰つてゐたから、委しいことは知らぬ。とも角永代が何かやる、女も暑中として帰国してゐたので、上京の途次、神戸に立ちより、永代と相会して交驩を深うし（或は初めての対面であらう）、虫声しげき夜の夢野の露をふみつゝ、二人の性格から来たであらうところの烈しい恋を囁きあつたであらう。

之が終つて永代は同志社へと帰校した。女は暫く神戸に残つた——美知代の兄は岡田実麿といつて、当時神戸高等商業に教鞭をとり、後一高に移つて新渡戸校長の下に英語の教師として相当に聞えた人である——この実兄の許に足を留めた

女も、九月に入つて東京に向つた、実麿氏は之を神戸駅に送ると共に、何日何時の汽車で出発したといふ通報を花袋氏に送つた。花袋氏はその着時刻に東京駅（新橋駅？）に迎へに行つたが、女は来ない、この、若い愛弟子を駅に迎へるといふことすら烈しい愛欲の興味をもつてゐたであらう花袋の、その時の失望、寂寥は想像に余りある。

所で美知代はその翌日か翌々日かにプルリとして師の許に帰つた。之は師としての監督上の責任から云つても容易ならぬ事で、女を手づよく詰問した。その結果は、意外にも、わが掌中の玉とも思ふ愛弟子に、恋人が出来てゐた——

美知代は神戸を発つて京都に下車し、同志社の寮に永代を訪ねて、大胆にも其夜琵琶湖上に舟を浮べて明月を賞し、一夜をあかして二人は別れたのであるが、その為、兄の通報と時間が喰ひ違ひ、その経緯を責め問はれて、遂に心を決して一切を打ちあけて了つたのである。

所謂「中年の悲哀」を感ずること烈しい花袋の煩悶は、ハタの見る目も気の毒なほど、真剣に、深刻になつて行つた。

美知代にとつては、愛されること深いだけに、それが一層つらい、その苦悶はひつきりなしに京都へ通報される。多感の青年は晏如としてゐられぬ、思はぬ恋敵が出来たと思つた、花袋氏から

僕は君等の恋を決して妨げるものではない

といつた薄墨書きのハガキを受取つたものの、そんなことで安心し満足するやうな青年ではない、殊に烈しい血の燃え立つて抑へがたき時である。今は矢も楯もたまらず、遂に同志社の学業を抛つて上京し、早稲田に籍をおいて、若松町あたりの酒屋の二階に下宿した。当時花袋氏は牛込山吹町に居を構へてゐた頃であるから、二人の距離は目睫の間となつた。師の目をぬすんで相逢ふ機会は繁くなつたのである。△尤も私がこの年の暮、上京するまでは、芝の愛宕下あたりの下宿にゐたのである。

が、永代は神戸教会に於ける篤信有為の青年として、学資の一部を教会から受けてゐたのであるから、それを放擲した彼は忽ち糧道に窮し、これより苦学の貧書生としての生活が初まつた。折々女が小使の中から何かと心をつけてゐたことは無論であらう。

〔中略〕筆写者注——この文の筆者中山三郎が、神戸を離れて上京するまでの、主として個人的理由が述べられている。永代と美知代の事に直接関係をもたないので省いた。要は神戸教会の青年男女の内に刷新の動きが起り、原田牧師宅に住む中山までがそれに加わつたことを暗に非難され、留り難くなつたこと、旁々教会での仕事に自分の能力の限界を悟り、文学への気持が育つて来たことが、上京の理由である。「そこで私の最も畏敬してゐた淡路の病詩人一色白浪兄に事を相談し、兄も私にひどく

同情して、東京の中村春雨氏に私の事を依頼してくれられた。春雨氏は一面識はないが、私の同郷の先輩である」（中山）。そして年末に上京、中村春雨（吉蔵）氏を訪ね、その紹介で、京橋五郎兵衛町の金尾文淵堂で働くことになつた。

この私の上京は、永代（馬橋）と美知代（敏子）とのその後の関係を一層深からしめる事となり、事件の中心にまで接触する事になつて、遂に「縁」に登場することにまでなつた。因縁はいたし方のないものである。

東京へ来て、永代に会はれることは私の楽しみの一つであつた。所謂「蒲団」事件に於ける二人のラヴアッフェアが、それ程深刻に発展してゐるといふことは全然知らないのであるから、永代に会ったら、なぜ同志社を捨てて東京に出て来たか、その事情も聞いて見たいと思つた。その頃永代は芝の愛宕下辺の下宿にゐたから、上京と同時に私の居所を知らせ、正月休みにはゆつくり会ひたいと云つてやつておいた。

ところが大晦日の夜の十時ごろ、ヒョッコリ文淵堂の店さきにやつて来た、襟巻一つなき寒そうを姿をして悄然としてゐる。狭い店先で荷造をしてゐる最中の事とて、腰をかけさせる余地もない。

「やあ、どうした。」

といふと、

「俺は今夜下宿を追はれて、宿なしになつたのだ。」

といふ。委しい事を聞きたかつたが話すひまもない。それで私は、原田牧師から貰つて着て来た二重廻しを出して着せてやり、神戸を出発の時、前年同志社に永代を訪うた時共にした横山佐野女史が私にくれた懐炉を出して永代の懐ろに入れてやり、外濠線の電車券一枚を与へて

「君、今ばんは電車も終夜運転で、外ぼりは夜中ぐる〳〵廻つてゐる、十二時ごろまで町を散歩して、あとは此の外濠線を明け方までぐる〳〵廻つて乗つて、夜があけたら来てくれ給へ」

といつて、帰つて貰つた。金尾文淵堂では、再興早稲田文学の発行を引うけ、それが大晦日にかけて出来上つたので、夜おそくまで荷造をし、明くれば明治三十九年の元旦、朝めし前に新橋駅に其の荷物を出しに行き、店に帰つて朝食をしたゝめたところへ、永代がやつて来た。そこで私も休みをもらひ、永代と二人で、鍛冶橋から二重橋前に出で、濠づたひに空つ風に吹かれ乍ら、話し〳〵麹町を経て四谷荒木町まで徒歩でのして行つた。道々、美知代との関係を少しづつは話して聞かせたが、まだ二人の交渉について、底をつくまでには話さなかつた。

荒木町には伯父の家があつたので、そこへ永代を伴ひ、こゝで雑煮をこしらへて貰つて始めて正月らしい気分になつ

た。

その元旦の夜、永代は友人のツテで早稲田若松町あたりの酒屋の二階に下宿することになつたのであるが、こゝから田山花袋氏の山吹町の宅には極めて近い。自然、美知代がお使ひなどの外出の時間を偸んで、きびしい花袋氏の監視の目をのがれて永代に会ひに来ることが出来、二人の恋はます〳〵熱くなつて行つたのは当然のことであらう。

「僕は君等の恋の保護者である」

と云つた花袋氏であるが、その実「中年の悲哀」を感じて、愛弟子を若き青年に奪はれたといふ悶々の中に、烈しい衝動を感じ、毎日酒に悶をやつてゐるといふ有様であるから、露骨に云へば恋の競争者――恋敵である。二人の為に決してよき保護者であらう筈はない。

而も一面には、監督の責任を持つ、その目の前に、所謂「悪い虫」がついたのであるから、そして女の方も大あつ〳〵で、いつどう事が間違つて発展しないとも限らないのであるから、花袋氏も遂に之を美知代の親に知らせてやつた。

親はおどろいて上京した。娘の心も動かしがたいので、遂に永代に会ふことにした。見ると、見すぼらしい一介の貧書生である。地方での資産家であり、名望家であるこの父親として、どうして此の貧書生を拾ふことが出来よう。結局、男の方が東京を退去するか、でなければ娘をつれて国へ帰るといふのである。男が東京を去れば、その学業もそれでトマリ、娘にあきらめさせるに好都合。男が東京に頑ばれば、娘を国許に監禁してその中に良縁を探してやれる。父親の腹は此処にあつた。永代も此の難題には思案に余つて、遂に一切を打あけて私に相談に来た。私は風の吹く寒い日、永代と美知代とを牛込のあるお寺の境内へつれて行つて、更に委しい話を聞いたが、私は、

「それは永代の方で断じて東京に止まり給へ、地方へ退去したら、志望の文学の途へ進むことは出来ぬ、東京に踏止つて勉学して、一旗あげたら、いつでも堂々と結婚は申込まれるではないか。君が東京を去つて凡々たる男になり下つたら、もう、それが女との縁の切れ目である。」

と云つて、一時あきらめて美知代を国へ帰らせたまへと切言した。永代も遂に決心して

「では然うしよう。」

といつて其の決心を田山氏に告げるべく別れて行つた。「蒲団」に馬橋が友人に相談に行つた云々とあるのは、このお寺の境内での一事である。

所が、花袋の前に再び出た永代は意外にも、

「私が東京を退去しますから、お嬢さんは東京において下さい。」

と云つて了つた。それは永代にして見れば、女をこの父の手

に返して了つては、又何時逢へるか分らぬ、とも角東京にゐてくれれば、何とかしてでも相逢ふ機会も出来、イザといふ時は、どういふ非常手段も取れると考へたからであらう。永代が斯う素直に出たので、父親も

「それでは娘は東京において行きます。君も前途のある身だ、折角一心に勉強して出世したまへ。」

と云つたので、永代は安心して下宿に帰つて来た。

ところが事実は急転直下、永代はまるで後ろから谷底につき落されたやうな目にあふこととなつた。その日の夕方、もう日も暮れ〳〵の頃に、花袋氏宅の女中が、あわたゞしく永代の下宿にやつて来て、美知代からの一書を手渡した、と見ると、

「私は父につれられて、今夜〇時発の汽車で新橋をたちます。」

といふ走り書き。永代は愕然として自失茫然、時計を見ると、時間も迫つてゐる、まだ電車の便も悪かつた其の頃では、早稲田の奥から相当歩かねばならぬ。永代は気が気でない、遂に下宿のおかみに金五十銭也を借りて俥で新橋へかけつけ、危機一発のところで発車に間に合つた。併し、女は父親と共に已に箱に乗り込んでゐるし、花袋氏も送りに来て窓側に立つてゐる。どう近づきようもないので、柱のかげにからだをかくし乍ら、よそ乍らにその出発を見おくつた。

花袋の「蒲団」が新小説に発表された時、その口絵となつたものは、実にこの新橋駅頭に於ける哀しき別れの光景を描いたものであつた。

正面からの恋とは意識せざるまでも、「中年の悲哀」に悩んでゐた花袋が、——自分の文壇に於ける生命をも一変して彼女の為にこそ際だつて偉くなり得たと思ふ花袋が、——遂に最愛の弟子と別れねばならなくなつた。これは実に忍びがたき痛苦であつたらう。花袋は美知代に恋人が出来てからは、我知らぬ悶をやる為に酒を呻るやうになり、酔ひつぶれて便所に寝込んで了つたりしたこともあつて、美知代は

「この頃の先生は少しヘンよ。」

と云つて、その頃の花袋の狂態を話して聞かせたことがあるが、其の「ヘンな先生」は女の部屋に入つて、その著てゐた蒲団を引きかぶつて、女のかざを嗅いだ——

これまでが、第一部作「蒲団」に描かれたあらましである。

(二)「蒲団」から「縁」まで

永代と美知代との恋は、それ〳〵の性格から来る情熱の、実に烈しいものがあつた。その二人が、今は所謂「生木をさかれ」て西と東とに相別れ、お互に文通することすら出来なくなつた。せめては手紙を取交す。二人の心を相ふれしめて

行く手だては是より外にないのであるが、それさへ断たれた今の苦痛はハタの見る目もいぢらしい程であつた。美知代は知らず、永代の憔悴は日に増し目に立つて来て、私も見るに忍びなくなった。

そこで私も一策を案じ、永代の手紙を更に封じて、私の知つた神戸女学院の女先生の名をかたつて、美知代の許に送つて見た。これが見事成功して、早速女から私の方へ返事が来た。永代の喜びは一通りでない。それからは、遂に私が二人の交換局となつて了つたのである。

私が女学院の先生の名を知つてゐるのは、四人か五人しかゐない、その名を取つかへ引つかへ利用して、永代の手紙を送る。その都度女から返事が来るが、之は何も私に寄越す必要はない、永代の下宿先も知つてゐるのであるから、先方からは直接の返事を出してよい筈であるが、美知代は決して然うしなかつた。而もそれが、永代にあてたものは一つもなく、皆私への手紙である。が、読んで行くと、私へまで心の消息を語る体にはなつてゐるが、結局また其儘永代への手紙である。私は女のこの辺の才筆に敬服せざるを得なかつた。そしてこれらの手紙を一々特に私にあて、私の下宿によこしたのは、永代の返事を一々、私の手を煩はすので、その顔をつぶさぬやうに、又永代が私に面倒を頼みよいやうにとの女の心づかひでもあつたらうと思ふ。

併し私は、その長文の所謂恋文を一々読みはしなかつた、一応くりひろげて、私あての名だけよんで、又くるくとまきをさめて、永代に渡してやつたのであるが、いつか、ふと目にとまつたのは、

これがまあ　ついのすみかか雪五尺

といふ一茶の句を援いて、故郷の山中に閉ぢこめられた心のわびしさを切々と訴へてあつたのには、図らずも心を打たれたことであつた。

㈢　美知代の上京

女が山にこもつてから約二年の歳月は流れた。明治四十二年（？）の春まだ寒い頃であつた、私は永代と共に京阪地方に旅行をした。京都では知恩院黒門前に住んでゐた旧友佐伯大太郎君を訪ぬて、永代と共にそこに一泊し、翌日大阪に入つて、その頃大阪日報に勤めてゐた安成二郎君（歌人）を訪ねたりして、私は一足先に東京に帰つたが、永代は一日か二日おくれて帰京した。

その頃私は、金尾文淵堂の残党薄田鶴二（泣菫の令弟）河本俊三の二人と、三人相組んで獅子吼書房といふ書店を開業、京橋区築地本願寺裏の南小田原町に三人同宿の居を構へてゐたのであるが、それは牛込柳町の多摩川館といふ下宿を引払つて間もないことであつた。

ところが、大阪から帰つて間もなく、

「明〇〇日、九段大村銅像のところまで、午前十時に御出

で下さい」

といふ美知代からのハガキを受取つた。「オヤ、美知代が上京したナ」と半ば驚き、半ば安心した。ハガキは無論私あてであるが、之は例の筆法で、永代に来てくれの意である。併し、そのハガキは私の前の下宿にあてたのが廻送されたのであるから、もうその指定の時日から四五日経つてゐる。女が上京した以上、何もあわてる事はないから、その内永代に会つたら知らせてやらうと思つたが、不思議なのは、そのハガキ差出の日から推測して、我々が京阪地方に居た時に美知代は上京したものと思はれ、或は永代の東帰の同じ日位に美知代も東京に入つたのではないかと考へられたことで、此処にも何だか奇しき因縁があるやうにさへ思はれた。

さて美知代は上京して小石川の兄の許へ来たのか、イキナリ花袋氏の方へ行つたのか、何れにしても女が上京した以上、直接永代に会つて、この報告をすると共に後事を相談してやらうと思ひつゝ、荏苒日を過してゐる中に、或る日、永代と美知代と二人つれだつて、南小田原町の方へ訪ねて来た。いつどうして二人が落ち合ふやうになつたか、恋する人同志の一念は恐ろしいものだと思つた。永代は

「今度は、花袋先生が絶対責任を負ふといふ条件で、やつと美知代君の上京も許されたのださうだから、今後はお互に真面目に勉強して、二人が早く結婚が出来るやうに努力したいと思ふ。」

と云つたので、私も

「僕も折角その事を注意したいと思つてゐたことだ。今度又下手をしたら、国のお父さんの怒りも一倍だらうし、万事はそれで毀されて了ふからね。」

と、兄らしい口ぶりで忠告した。

(四) 美知代の奪ひ出し

恋は盲目、と昔から云ふ。恋する者はかくも大胆になり得るものか——小心の私には想像だに出来ぬ意外の事実が、二人の間に湧き上つて来た。

その年の夏半ばの頃であつた。美知代は、一人で二三回私を訪ねて来た。その度に何かしら深い煩悶のあることを訴へて、

「永代とも別れたい。」

と云ふ。永代と喧嘩でもしたのか、それともアキが来たのかと尋ねると、

「そんな事はないのですが、一切は私一人で、事を解決すればいゝのですから、私は自分の生命を断つてもいゝと思ふ、私は覚悟してゐるのです。」

といふ。烈しい情熱の女として、只、冗談にはすまされぬ亢奮した口ぶりである。

「僕にはナゾのやうな事は分らない、永代と喧嘩したのでも、アキが来たのでもなくて、二人が別れるの死ぬるのといふ法はない、それ程強い決心なら、どうせ文壇に浮名を

流した二人だ。二人で立派に情死したまへ。」
と私はきり込んで行つた。そして色々と切込んで問ひつめて行つて見ると、意外！　美知代は已に妊娠してゐたのであつた。
之は一大事だ、これでは花袋氏の立場も全然なくなるし、国の父の怒りも、凡そ想像が出来る。なるほど死を以てでも詫びるより外に手はない。そして此の女なら、死にかねないと思つた。
「本当に死ぬる気か。」
と、直截に今一本切り込んだ。
「えゝ」
といつて女はさくりあげて泣き入つた。死ぬ、死ぬといふものが、容易く死ぬるものではないが、これは一つ、私が何とか解決してやらねばならぬと思つたので、その「死ぬる気」をわざと正面から受取つて、
「死ぬのは何時でも実行出来る。それ程の決心があるなら、其の死を暫く僕にあづけて、僕のいふ通りになつてくれぬかね。」
と云ふと、女は泣顔をあげて、
「どうするといふのですか。」
と不安そうに私を見守つた。
「斯うなつては一切の破局だ、田山先生に対しても詫びやうがないが、国のお父さんには尚更おわびではすまんでせう。第一、田山先生の責任の事を考へても、方法の施しようがない。結局あちらも此方も破れて、国許へ再び監禁され、永代との将来も只絶望があるばかりだ。」
私は然う云つて、女の心を引いて見つゝ、咄嗟に考へた方策を切り出して見た。
「どうです、死んだ気になって、僕のいふ通りになつて見て下さい。それは、田山先生の責任にもならぬやうに、先生の宅を脱走して、一時どこかへ身を隠すのです。つまり永代が奪ひ出したといふ事にして、身をかくす。するとお父さんも、田山氏なり永代なりに対する思ひは恐らく手ひどいものであらうとは思ふが、娘に万一の事でもあつてはといふ心配の方が大きくなつて、捜索に一生懸命であらう。その中に時機を見て――赤ん坊が出来てからの方がよい、万事は是だからと、事実を以て一切を解決するより外に手段はないと思ふ。」
諄々と説いて行く中に女もやうやく納得して来た。
「では御意見どほりにして見ます、併し先生は九州の方へ御旅行中で、そのお留守中では奥さんに御迷惑をかけるのが辛いですわ。」
「そんな事今更心配してゐては仕様がない、お留守は尚以て幸ひだ。小石川のお兄さんも御避暑中とのことならこれも好都合だ。」
然ういつて、私の授けた方策といふのは、花袋氏の許におい

てある衣類を二三枚づゝ小石川の兄の方へ運ぶ、行李には古新聞をつめて行く。あらましの持出しが出来たら、小石川の方で荷物にまとめ、どこか千葉県の海岸の方へでも行つて漁師の家の一室でも借りる、永代もあまりそちらへは行かぬやうにすること。行つて足がついては困るから——

此の方策は見事成功した。田山氏の宅から何回かに渡つて衣類を持ち運んでゐる中に、永代は千葉県九十九里方面へ出かけて、本納辺へ一軒か一室か借りて来た、それで、小石川の宅で荷造りする時には私も手伝ひに行つて、（此処は女中ばかりだつたから、何もかも上首尾に運んだ）二人は或る日、相つれ立つて、その海岸へ出発した。

(五) 花袋氏と私と

再び美知代を失つた後の田山氏の苦悩は察するに余りある。自分の最愛の弟子、それを一歩進めた恋女（と私は断言し得る）、一面には自分の文壇的生命の守り本尊、いはゆる「吾が仏」である。その故にこそ、あのカチ〳〵のやかましやの父を口説きおとして、「自分が責任を以て監督する」といふ、堅い誓文の許に、危険の東京に再び呼び出したのである。花袋氏は自分の断ちがたい愛著と、あの頑固一徹の父に対する責任とでどの位の苦痛煩悶を重ねてゐるか分らぬ。恐らく花袋氏は、血まなこになつて美知代を探したことであろう。

この夏永代は「フォア・ランナー」を訳了した。といふことを読売新聞の「よみうり折」に発表した。花袋氏は之を見のがさなかつた、それに手蔓を得て、永代の居所をつきとめ「面会したい」といふハガキをよこした。その頃、永代は私と一緒に牛込柳町の多摩川館といふ下宿に居たのであるが、永代は会ふのはイヤだといふ。私は

「結局、いつかは会はないではすまない、折角斯ういつて来たのだから、会つて見たらどうだい。女の居所さへ云はねばそれで好いではないか。」

と勧めたが、どうしてもイヤだといふ。併し私は花袋氏の苦痛を想察し得るだけに、会つた方が却つてよいと思つたので、それでは先づ僕が代つて会つて来ようといふと永代もやつと賛成した。

そこで私は田山氏に、永代に代つて伺ひたいといふ返事を出し、花袋から早速、いつ〳〵来てくれといふ絵ハガキの返事が来たので、私は代々木に行つて初めて田山氏に会つた。本書二九四頁に出て来る「山田」といふのが即ち私で、これから田山さんの描く、永代、美知代の生活の中にポツ〳〵登場して「あること」「ないこと」が書かれてある。私は「蒲団」なり「縁」なりについては、私自身に取つての深い思ひ出があまりにも多いのでいつかは自分の「半生史」的のものを書いて見たいと思つてゐたのではあるが、それは別問題として、此の作中に描出されてゐることについて、多少抗議したい節もあるので、遂にその思ひ出の一端を、この書にかきつ

けるに至つたのである。

明治の末葉、自然主義文学が勃興してから、身辺小説が流行し、従つてモデル問題も相当やかましく論ぜられ、結局、作者のこの芸術化された作物に、かれこれ抗議をすることは愚だ、といふことになつたのであるが、併し田山氏ほど、自分の生活を真実に描いた人はない、この真実の描写といふことでは、明治大正を通じて花袋氏の右に出づるものはあるまい。殊に「縁」に至つては、過去の田山氏に見られぬ、真実の描写であつて、その点では幾多のモデル問題をおこした藤村氏も及ばぬ程の、尊い人生の一記録である。それだけに、この中に描出された私のことに就いても、尚更書きとめておきたいと思ふ節もあり、又一つには、茲には描出されてゐない所謂「楽屋話」の事実をかいて、この作品に一つの興を添へても見たいと思つたので、つい長々とこゝに書きつけることにしたのである。

花袋氏の苦悩は果して私の想像してゐた以上であつた。

「美知代は東京にゐますか。」

「いえ、東京ではありません。」

と答へただけで、尚警戒を解かなかつた。

「君、国のおやぢの責め方には弱りきつてますよ。」

と云つて、その父親の長々しい手紙、問罪状を何本か見せられた。

「つまり七生世を更へても斯の如き男にはやれない。といつて私生児を以て此方の戸籍をけがすことは尚出来ぬ。結局永代君に添はせぬことを条件として僕の養女にしてくれ、といふのです。取りかへしのつかぬ事は仕方なしとして、この疵物を僕の籍に入れ、その私生児又は庶子の汚名を僕になすつて、せめてもの腹いせにしようといふのですね。」

田山氏は苦笑しながらも、その苦悩を抑へきれぬといふ形であつたが、もう斯うなつた以上致し方なしといふ考へに、いくらか感情も緩和されて来たと見えて、

「とに角も、僕が引うけて二人を結婚させてやりますから、一応東京に帰るやうにして下さい。」

と、それから頗る砕けた話になった。

「国元の父といふのは酒も呑まないカチカチの頑固爺ですが、なあに、禁酒などいふのは、昔大酒を呑んだ揚句の行に極つてますよ。」

などと、大分悪口も出て来た。私は、

「先生がそれ程二人の上に御同情があると知つてましたら、こんな二人が逃げかくれたりするのではなかつたでしようが。」

と云つて、兎も角二人——といふより美知代を東京へ呼びもどすことを約束して帰つた。

永代は仲々落ちついて東京に踏止まつて勉強などする気になれず、又しては女の方に行つて了つて、下宿はいつも明け

きりであつた。私は早速永代に其事を伝へると、すぐ又千葉の海岸へ行つたが、それきり帰つて来ない、漸く秋になつてから、いよいよ帰京するに極めたから、どこか家を探してくれといふ手紙をよこした。

(六) 新家庭、やきもち、出産

牛込原町の騎兵学校のそばの家を見つけて、そこへ二人が帰つて来たのは大晦日の、日も暮れて後であつた。その日、安成二郎君にも来て貰つて、掃除をするやら、所帯道具を買ひ調へるやらで、一対のお雛様を安産せしめる為に、安成と私とはテンテコ舞であつた。大晦日の事で、市中どこの店も夜あかしであつたから助かった。やつと夜半の十二時ごろ、一通り整頓して、一杯茶をのみ、私達が引あげたのは明け方三時ごろであつた。

一夜あくれば、イヤ一夜あけない内からお正月だ。永い間の苦しい恋の正式（的）に成就しての新家庭、さぞこの新婚生活は、フレッシュで楽しい極みであらう——と思ふのはハタからの想像にすぎない。新居といへども、二人は疾つくに千葉の海岸で演習ずみ。フレッシュの感のあらう筈なく、といつて、お互に鼻につく時でもないが、何しろ両方が我儘と来てゐるから、家を持つた早々から感情の衝突——世俗にいふ夫婦喧嘩の絶え間がない。永代は遂に一生を通じて我儘を通した位の男、美知代も亦自分のプライドといふものを押通して来た程の女、その二人が又人一倍烈しい情熱を持つてゐたのだから、一寸した茶飯事にもお互に譲歩といふものが無い、そこへ又、お互に烈しいヤキモチ家と来てゐる。之が又、人並はづれて烈しいのであるから堪らない。

永代は永代で、美知代が、内証で花袋氏の所へ行きはしないかと警戒してゐるし、この永代の家の近所、山吹町には田山氏の姉（嫂）さんが住つてゐたが、美知代は折々そこへ行く、それさへやかましい。それ所でない、近所へ美知代が豆腐を買ひに行つたといつて妬く。美知代は美知代で永代を新聞社に訪ねて行つた時、永代が電話交換手の方に向いて何か笑ひ顔をしてゐたと云つて大喧嘩を始める、といつた始末。後に永代が茶屋酒などに親しみ、其のヤキモチで眼をつりあげてさわぐ時、私が面白半分にひやかすと

「私はヤキモチなんか焼きはしません、只、私といふ妻がある、そのプライドを傷つけるからやかましくいふのです。」

といつた気の傲り方だから手がつけられないのである。

その中、永代は二三軒隣りへ引こした、その頃、私は、例の獅子吼書房失敗後、職もなくブラブラして困つてゐたので、二人が来いといふまゝ永代の家にころげ込んだ。若夫婦の処へ同年輩の男がのりこんだのである。そして二人とも格別のヤキモチ屋と来てゐるのである。随分あぶない芸当であつたが、そこはうまいものであつた。私はこの家庭へ入る

とから、月に何回か夫婦喧嘩の仲裁をやる。その時は、いつも永代の肩を持つて、

「おい、好いかげんにしろ、夫婦なんていふものは、二世どころか、一時的のものだ、そこへ行くと友情は長い――」

といつて、永代を散歩につれ出す、そして二三時もすると帰つて来る。美知代も私に云はれる、いつもの

「夫婦は一時のものだ、友情は長い――」

といふのが腹へしみ込んで、心細くなつてゐる所ではあるし、又永代をつれだした私が、どこへもぐれて飛ぶでなく、コーヒーの一杯ものまずに必ず連れて帰つて来るので、之は男がヤケに飛び出して、面子上、酒でもかぶつて遅く帰つて来るよりは難有いから、私を一種の安全弁と見て、腹も立てられない。――この呼吸で、私はうまく若夫婦の中に入り込んで久しく事なきを得たのである。

その頃永代は毎夕新聞に入社してゐた。その永代は毎日、社へ出かける、私は無職で終日家の中にゐる。つまり美知代と二人ゐるわけで、別に下宿料も払はぬのだから、奉仕がはりに買物に行つてやつたり、裏口へ出て共同井戸の水汲みもしてやる。成程近所では、どちらが「ご亭主」やら分らなかつたかも知れぬが、自分にはそんな噂があらうとも思はなかつた。

お産の日が来た、その日は生憎永代は夜勤日で、早くても午前一時ごろでなくては帰つて来ないのであるが、その夜の十時ごろから美知代は陣痛を訴へだした。私は狼狽した、何しろコイツは出くわした事のない経験だから、どうして好いか方角が立たぬ。とも角山吹町の嫂さんの許へ行つて産婆の住所をきき、それを叩きおこして帰つて来ると、すぐ思ひついたのは、赤ん坊が産れたらお湯が要るだろう。ところが、新世帯にはスヤキの土釜以外に鍋も釜もない、コリヤ一大事だと、寝てゐた大家さんを叩きおこして三升だきの釜を借りて来て湯を沸しておいた、この機転だけは田山の嫂さんに大いにほめられた大手柄であつたが、そんな事から、この嫂さんから、いろいろの材料が田山さんに提供されたと思ふ。

産婆は仲々来ない、産婦は切々苦痛を訴へる、といつて三畳の室に寝てゐるところへ踏み込んでどうすることも出来ぬ、やつと十一時すぎに産婆がやつて来た。私は只管永代の帰りを待つてゐると、一時近くなつて、美しく冴えた月光を浴びながら、永代は深夜の街に大きな声をはりあげて詩を吟じつつ帰つて来た。私はやつと安心して、一切を永代に引ついで、面倒臭いから先へ寝て了つた。

この「縁」では、私が産婦の腰を押してやつたやうな事が書いてあるが、これは飛んでもない事である。また後に産婦の後に産婦の乳が張つて困つてゐる時、私が永代にからかつて、その乳を吸出してやらう、といつて、永代が「いかん、〳〵」といつたやうな事が書いてあるが、二人の間にそんな問答をした事はない。

(七) 永代と私と遂に別れる

この「縁」で見ると、永代と私とは、あれ程の親友であつたのが、遂に分離して了つた。その原因は、永代の不在中、私が美知代に対して何か変な事を云つたりして、美知代もイヤがり、永代も例の人一倍のヤキモチ屋だけに、二人を疑つて面白くない感情を持つやうになつた、といふ事になつてゐる。

二人が不愉快の感情で別れたことも事実である。その弁明として、永代が田山氏に云つた事も、恐らく此の書にかかれてゐる通りの事実であろう。併し、その事実は甚だ違つたことであり、私が美知代に対して兎や角の事を云つたなどと、飛んでもないことである。

そんなら何故二人は別るゝに至つたか。私としては、花袋氏への抗議として、事実を一応弁じておかなければならぬ。

これ程、若夫婦の中に介在して巧みに泳いで来た私が、どうした不覚でこんな事になつたか。

私は文淵堂破産、獅子吼書房倒産以来、これといふ面白いことがなく、依然として永代の家にゴロ〳〵して厄介になつてゐたが、その間に、俳文一篇をものして、雑誌「ホトトギス」に投じた、郷里津和野の方言を会話に用ゐての一短篇小説であつたが、それが「栗の樹」と題して掲載された。私は只一俳文としての投書のつもりであつたが、それが小説として扱はれ、(平凡社の文芸年表にも之を小説として扱ひ、私の名(中山蕗峰)を小説家の中に入れられて赤面したのである)原稿料として金八円五十銭を送つて来た(十七頁あつたから、一頁五十銭といふのであらう)。之は私に取つて思ひがけない事であつたが、美知代はそれを読んで非常にほめ立てた。それから又ひま〳〵に一少女劇のものを一篇認めたが、之は何処へも送るツテがないので、美知代に読んで聞かせたところ、之も大にほめて、

「中山さん、一つ本気で作家になるといいわ」

とおだてあげた。これが大変な事になつたのである。

永代は固より創作家として、純文人として立つのが最初からの志望であつたことは云ふまでもない。ところが生活の為に新聞社に入り、毎月雑文をかいてゐるのと、忙しさとに追はれて、只の一つも創作は出来ない、その点で非常に煩悶してゐる最中であつたが、美知代に取つては、これが又大の不平であつた。二人揃つて文壇に打つて出る、それが最初の夢であつたが、永代は一向創作もせず、自分も今は子持ちとなつて何一つ出来ない、せめて永代を何とかして文壇に押出したいといふ一念から、それを激励する意味で、私の右の二作を大袈裟にほめあげて了つた。その結果は、煩悶懊悩の底におちてゐた永代に対して、却つて焦燥をまさせ、それが例のヤキモチと結合して、遂に私に対して妙な感情を持ちはじむるに至つたのである。

成程、私も軽率であつた、少女劇の方は原稿のまゝであつたから、私は美知代の乞ふがまゝに読んで聞かせた――永代の不在中、私が原稿をよむ、美知代が顔を近うしてそれを聞いてゐる。そして

「中山さんに読んで聞かせて貰つたわ、ステキよ」

などといふ、之は永代に取つては不愉快千万の事であらう。が、そんな事でやかれようとは予期しない事で、此方は一向平気であつたが、妙な時には妙な事が重なるもので、私が或る日早大の野球を見に行つて、帰りに、通りがゝりであつたものだから、例の「お三輪さん」――田山氏の嫂さんの許へ、何かの用事で立よつた、ところが、そこへ美知代が来てゐた。之は容易ならぬことである。永代は美知代が田山氏の所へ出入しはせぬかと警戒してゐるのは固よりだが、この「お三輪」さんの処へ行く事も非常に不愉快を感じてゐたのであるから、こいつはバツが悪いと思つて、一足先に帰らうとすると、美知代は平気なもので、

「アラ私もお暇するわ、一緒に行きませう」

と云つて立上つた。尚更以て之は重大事件だと思つて、

「イヤ僕はお先へ失敬する」

といふと、

「あら、おかしいわ、一緒に行つたつて好いぢやありませんか」

といつて、遂に私を追つかけて出て来た。家までは四五丁もない所であるが、已を得ず一諸に帰つて来ると、「妙なはずみ」は此処にも待ちあはせてゐた――永代は已に社から帰宅し、美知代の出先を婆やに訊してゐたところである。美知代の使歩きの外出にさへヤキモチをやく永代の目の前に、而も「お三輪」の家で落ち合つた二人がつれ立つて帰つて来た――穏かならぬ空気が次々にかもされて行くのは、考へて見ると当然至極の事である。

その頃から、三人一緒に飯を食つても、永代は苦りきつた顔をして物一つ言はぬ。初めは、美知代と何か喧嘩でもしてゐるのかと思つてゐたが、段々それが、私に対してであることが分つて、私は吃驚したが、この稀代のヤキモチ家たる永代としては当然の事で、それを百も承知で巧みに泳いで来た私としての不用意、不注意、軽率さが、つくぐあほらしくなり、この儘で、こんな処に居られはしないと思つて、本郷丸山福山町の下宿に引こして了つた。

二人が別れた経緯はこんな次第であつたが、何しろ、二人の恋の成り立ちから、長い間の交換局、美知代の奪ひ出し、二人の家持ちの世話、花袋氏との間の斡施、その他何から何まで、二人の生活には切つても切れぬ筈の私と永代の喧嘩(?)別れである。その事を花袋氏に問はれて見れば、何とかうまく繕はねば永代の立場はあるまい、そこで出たらめに、「不在中、妙な事を云はれるといつて美知代が困つてゐる」などと、出まかせをいふのも仕方があるまい、私は飛ん

だ男にされて了つた訳である。

(八) 家庭の解散

私が永代の家を出て、本郷丸山福山町に移つた下宿は、前に記した淡路の病詩人一色白浪兄の下宿してゐた宿であつた。さて此処へ越して来てから、美知代から、簡単に葉書で挨拶が来たきりで、永代は只の一本ハガキも呉れぬ、遂に七八ヶ月の間音沙汰なしであつた。斯うして失業の儘で一人淋しく下宿して、古本を売つて喰つたり、少女雑誌へ原稿を売つたりして食つてゐる心細さの明け暮は、人一倍友を恋ひ、友を想ふの心が深くなる、それだけに、永代との長い間の人並ならぬ交情を思へば思ふほど、永代の忘恩的な態度に、無上に腹が立つてならぬ。仮にも僕に、友情を破るやうな事実があつてならとも角、こんなつまらん事で、今まで私の尽した事に対して、斯の如き態度を以て酬いるとは——只私は無上に腹が立つてならなかつた。

そればかりでない、或日安成二郎君から聞くと、永代は最近、毎夕新聞社をよして、「中央新聞」に転じ、第一面に「老嬢の告白」といふ続き物を数十回に渡つて書いてゐるとの事である。

ナニ、「老嬢の告白」！ 之は一大事だ、と私は驚愕した、此の題目だけでハッキリ想像される事は、私の大事な「おつかさん」を材料に使つてゐる事である。とすると、私だけしか知らない色々の事を永代に話した事がある。

「はゝあ、それを書いてゐるナ」

と直覚したので、私の亢奮は絶頂に達した。その事が「おつかさん」に知れたら、お前何をしやべつたのだと叱られるのは分り切つてゐる。その責任上からも、矢も楯もたまらず、私は自動電話にかけつけて、永代を呼び出し、一別以来の挨拶も何もあつたものでなく、その「老嬢の告白」について詰問的に迫つて行つたところ、永代は平然として

「僕は之を社会的教育の見地から書いてゐるのだ、君から干渉をうける理由はない。」

とつつぱねて来た。私はやたらに亢奮してゐるだけに返す言葉がなく、ウヤムヤで電話口を離れたが、サア私の感情は愈以ておさまらない、私は自分が小男で力がないから、人と喧嘩するの不利を知り、子供の時から力を以て争つた事はないのだが、この時ばかりは、

「今度永代にあつたらブンナグッテやる。」

と一人できめこんで、胸をさすつてゐた。

筆写者注——「おつかさん」とは、前に省略した筆者の神戸時代の記述中に詳しい、神戸女学院の教師西山いほり先生である。教会の青年達が「マザー」と呼んでいた人で、筆者より十五六才年長、筆者は特に愛せられていた。「香道では恐らく日本一、茶道にかけても男子の大家も及ばぬ識見を有し、伎倆を有してゐる

人」と説明されている。

それから一月も二月も後の事であつた。私が本郷千駄木町にその頃移り住んでゐた、問題の「おつかさん」の所へ遊びに行つての帰りがけ、思ひがけなく永代を見つけた。或るインテリの婦人と何か立話をしてゐた。私は其のそばを悟られぬやうにスリぬけて、白山の坂に出て、小さい古本屋の店に入つて待つてゐた。さて撲らうと思つて見ると、どうしたキツカケにしてよいか分らぬ。感情ばかりが其の気になつてゐるだけで、イキナリぽかり、とやる術は知らぬ。が、見つけたのは百年目、せめて口でだけでも思ひさま言つてやらうと、逸る心を抑へて待つてゐると、果して永代は坂を下つて来た。私は店を飛び出して永代の側にぬつと寄り添うて、

「おい、永代君」

と冷たく、併し鋭く呼びかけた。永代の驚いた顔、――でなければ、あわてた顔、バツの悪い顔、それを期待して斯う驚かすやうに呼んだのであつたが、思ひきや、永代は、

「やあ、しばらく。」

と云つて懐しさうに寄つて来て、

「君の下宿はこの辺だつたね。」

と云つた、私は度胆をぬかれて了つた。斯う云はれて見ると、やはり旧い友だけに懐しさもある。

「うん、此の坂の下を入つた所だよ。」

「さうか、では是れから君の宿に行つてゆつくり話さう。」

サア之で何もかも、長い間の無上の腹立ちは解消だ。その時は前の下宿から半丁ほど離れたところのドブふちの下宿に移つてゐたが、私は永代をそこに案内し、豚肉を買つて来て、下宿の女中にスキヤキの仕度をさせた。すると永代は

「君、酒はないかい。」

といふ、私はおどろき乍ら

「ナニ酒？　美知代君は君にそんな自由を与へたかい。」

と聞くと、

「イヤ此頃は僕の教育で大分開けて来てね、酒はのんでも好い事になつたのだよ。」

変れば変るものと思ひ乍ら、女中に酒を命じて楽しく夕食を共にしたが、今度は、

「今夜は此処へ泊めて貰ふよ。」

といふ。

「イヤそりやいかん。家庭が大事だ、君、そんな事をしちやいかん、帰り給へ。」

といふと、

「構はんのだよ、此ごろは折々外泊して来ても、やかましく云はなくなつたのだ。」

私は益々不思議でならない、あの気位の高い、人一倍も十倍ものヤキモチ家が酒をのませ、外泊を許すやうになつたとは――信じきれなかつたが、どうしても帰らぬといふので、已を得ず一緒に寝た。

翌期もゆつくりして帰つて行つた。

その翌日である。事も意外の葉書を私はうけとつた。それは東京駅から出した永代の書で、鋭筆の走り書き、

「小生は家庭を解散いたし候、よつて今夜関西に向つて出発いたし候。」

とだけである。これで、酒をのみ、私の所へ泊り込んだ事も一切読めた。女王にも等しい威厳を以ての美知代の愛の繋縛、それが放縦度なきといつた永代、家庭の事が鼻について来だした永代に取つては、却つて重苦しい圧迫となり、その放埒性を発揮して酒はのむ、外泊はする、折角世にうたはれた愛の巣にも大ひびが入つて、遂に飛び出して了つたのだな、と分つた。

（あとで聞くと、此の頃は四谷の方へ移つてゐたが、放縦に流れ、めつたに家に帰らず、美知代も、もう覚悟して了つたと見えて、永代の飛び出したのを幸ひ、何の未練もなく世帯をたゝんで、花袋氏の許に引きあげて了つたさうである。）

(九) 腐れ縁

長い間の、切つても切れぬ親友が、遂に喧嘩別れをした、それが又、なぐり合ひにもならず、一緒に酒をのみ、肉を食し、一緒に寝て一夜を過した、而もそれが一方の家庭の解散日前日であつた、——何といふ不思議の縁かなあ、これも腐れ縁といふのかと、その因縁におどろいたのであるが、それにもましての文字通りの腐れ縁は永代と美知代との間である。

あつさり？　家庭を解散して関西に突つ走つた永代は、何か職を求めて思はしい事もなかつたのか、二三日もたゝぬ中に、

「スグカヘル、マテ」

といふ電報を留守宅（その頃は四谷に移つてゐた）の美知代に宛ててよこし、間もなく東京に帰つて来たが、思ひきや、家は空つぽとなつてゐた。

驕れる女王としての美知代も遂にこの放縦の男を制しきり得ず、よくよく愛想をつかした上の事とて、永代が飛び出したのを幸ひに、サツサと家を畳んで花袋の許に引あげる、花袋は愛する女弟子が三たび自分の所へ帰つて来たので喜んで引うける、といつた形で、永代は取りつく島もなくなつた。

で、再び私にすがつて、美知代の居所を探してくれといふので、無駄とは知り乍ら花袋氏を代々木に訪ねると、生憎不在で、夫人にそれとなく聞くと、

「私にはちつとも分りません、主人も誰にも云はぬといつてますから。」

といふ挨拶。

併し一念といふものは恐ろしいものだ、永代はどうしてそれを嗅ぎつけたか、遂に美知代の隠れ家——花袋氏の後の愛弟子水野仙子と二人で住つてゐた——を見つけ出して、奪ふ

やうにして美知代をつれ出し、二人で金沢から九州方面へと、地方の新聞社めぐりに落ちて行つた。この地方生活が二三年足らずであつたらうと思ふ。

この間私は、前川文栄閣の援助を得て、神田神保町に、女剣士として有名な村上秀雄女史の二階を借りて、春秋社といふ出版業を開始し、間もなく錦町三丁目に一戸を借りて此処で妻を迎へて新世帯を持ち、明治四十五年に麹町区飯田町六丁目十三に移転したが、所以あつて春秋社を一時閉鎖して隆文館編輯部に入り、こゝに三年過して、さて又春秋社を復活しようとしたが、第一次欧州大戦前の紙の暴騰に資力乏しく、その頃永代が虎の門で「イーグル」といふ雑誌を主宰してゐたので、之に春秋社を合併する事とした。所がこゝの資本主は、型のいゝ山師的紳士で金がなく、事業は一向発展せぬ上に、茲に集つたのが、新聞記者の連中や、女道楽では誰にもヒケを取らぬ佐藤隆三——有島武郎の弟で、里見弴の兄——などと来てゐるから、金さへあれば飲んだり遊んだりする、耽溺にかけては、人後に落ちぬ永代の事とて又も家を留守にする、その度に美知代はイーグル社へ押しかけて来る、そこで要領をつかみ得ないと、飯田町の私の宅へ来る、その頃、長女の（原町で生れた）千鶴子は亡くなつて太刀雄といふ男の子が四つ五つであつたと思ふが、それをつれて来て、張り番的に私を監視して永代の外泊先を知らうとする、私も家内もこの戦法には少からず悩まされたものであつた。

その中イーグル社は解散する、永代は又元の古巣の「毎夕新聞」に入り、小野瀬局長の下で働いてゐたが、耽溺生活は依然更らぬと見えて、又も家庭は第三回目の破局に陥り、今度は美知代も田山氏の許には帰れなくなつて、麻布霊南坂辺に二階借をし、その間、私は美知代に「ニコ〳〵式処生法」を書かせて出版したことがある。

この第二回の破局で、永代も愈々相手を思ひあきらめて了つたかといふと、決して然うでない、再び悶々の生活を送つて、ロクに社にも出て行かない、小野瀬氏も永代の編輯上の才能を認めてゐるものから、このまゝにしておくのは困るといつて、遂に乗り出して、再び、二人を今一度元へ戻すことにしようと云ひ出し、そこで、小野瀬氏は永代を説き、私は美知代を説いて、やつと話がまとまり、二人は三度目の家庭を結び、淀橋の柏木——今の東中野の駅近くに世帯を持つことにした。

(十) 最後の破局

こゝまで書いて来て、私の記憶に時日の前後した錯覚を発見した。

それは小野瀬氏と私とが調停してから柏木に世帯を更めて持つたのでなく、その以前、まだこの「再度の家庭解散」を決行する以前に、柏木に世帯を持ち、こゝへは私も親しく往来してゐたが、此の時代も所謂夫婦喧嘩は絶えず、それが相

当深刻なものであつたが、茲に思ひもかけぬ「新恋愛事件」が起つて、それが第二の家庭解散の最大原因となつたのであつた。

或る日、私は永代から久し振に飯を食ひに来いといふ招待をうけたので、出かけて見ると、いつも顔を見る美知代は居らず、台所は婆や一人で仕度をしてゐた。

「細君は？」

と聞くと、

「岡田のうちへ出かけたのだが、もう帰つて来る筈だが」

と甚だ返辞も冴えない、玄関の上り口に大きな風呂敷包みが一つ置きつぱなしにしてある。

何とは知らぬ淋しい空気の中に、二人で食事を終らうとすると、永代は

「実は君、今夜は美知代も共に三人で食事して、家庭の解散式を挙げようと思つたのだ。」

といふ。「又か」と思つたが、私は其原因を追求する興味も勇気もなく、そのまゝ別れて帰つたが、これは又、意外にも永代に大きな新恋愛問題があつて、合意の解散式もその結果だつた事を後に知つた。

この永代の宅から数丁奥の方に、美知代の令兄岡田実磨氏の宅があつたが、そこへ美知代の妹が上京寄寓して、何がし女学校に通学してゐた。いくつになつても青春の血に燃え切つて抑へられぬといつたやうな多情多感の遊子永代は、この義妹に恋愛を感じた。ある時は時を計つて女学校の帰りを擁し、ある時は日曜に誘ひ出して、二人で武蔵野を逍遙し、これが美知代にも感づかれ、岡田氏にも知れて警戒が厳重になると、宵暗にまぎれて出て岡田氏の庭の植込に忍び、口笛を吹いて呼び出さうとしたりしたといつたやうなロマンスがあつたさうだが、美知代もそれが自分の実の妹だけに、正真愛想をつかし、遂に「合意の解散式」を挙げるといふまでになつたのであらう。

この結果が、美知代の霊南坂に間借をし、私が「ニコ〳〵式処生法」の執筆を依頼したといふ段取で、「イーグル」時代はその後であり、この頃が耽溺の最も烈しい時代であつたが、その中、私共二人の調停で、更に新たな世帯を持つに至つたのである。

その中二人は新大久保だか西大久保あたりに居をうつし、こゝで「新聞及新聞記者」を創刊して自ら主宰し、更に「新聞研究所」を創設して、此の方面での仕事の先駆者となつたのであるが、之は案外収入の多い仕事となり、お抱へ車夫などを置いたりした位である、併し収入が豊かになつただけに、又も耽溺性が頭をもちあげて来たが、美知代も遂にこの奔馬を今までの方針では制しきれずと見て、家庭で酒を用ゐる事を許し、それにつれて家庭料理も実にうまくなつた。之が昔のお金持のお嬢様で、原町時代に、赤ん坊のお祝ひに赤飯を炊くといつて、米の煮え上つたところに小豆をぶちこん

で、まるで小豆には歯も立たなかつたのに比べて実に雲泥の差ではある。

その中永代の事業は発展して、京橋の松本楼の前あたりに事務所を開設、それが益好調子であつただけに奔馬は又も狂ひ出した。

間もなく大震災が来た、私は丸裸となつて再起不可能と見て、五日目に大阪に立つた、あとに残つた私の妻は、何とかして私を呼び返そうとして、その頃小石川の原町に移つてゐた永代をたづね、私に帰京を促す電報をよこし、私も一応東京の様子を探るべく帰京して、遂に当分永代の「新聞研究所」に入り、新に「出版内報」を創刊して、私はそれを主幹することになつたが、その頃の永代の耽溺性はますます激しく、震災の創痍癒えざる中にも、金が少し集るとそれをさらへて行つて飲みに行き、行つたら最後、二日でも三日でもしけこんで帰らない。私は然ういう方面にはつき合はないことにしてゐたが、或る時赤坂の数妓を擁して永代と二人大森海岸に出かけ、この近処に住つてゐた「時事」の社会部長矢野謙次郎氏（今の大阪の放送協会々長）を招いて徹宵飲みあかし、翌期漁船を海に浮べて舟中天ぷら料理などしたことがあるから、永代の無軌道脱線ぶりは相当のものであつたらう。

その中私は国民図書株式会社から「校註日本文学大系」を出版することとなつたので、永代の研究所を去る事となり、同時に「出版内報」は私が持つて出て自分で経営する事になつた。これが震災後の本郷浅嘉町時代で、小川誠文堂から発行する「こどもの科学」も私の創案で之にも関係し、至誠堂からは「最新漢和辞典」も発行するといふ、所謂八面六臂時代が来たので、永代の家庭を往訪する機会もなかつたが、いつの間にか、又も美知代と永代とは別れて了つて、美知代は太刀雄といふ男の子をつれて亜米利加へ渡つて了つた。

あれ程文壇に謡はれ、花袋に「傑作」を書かしめた二人、愛の強さの故に闘争の絶えなかつた二人、築いては崩し、築いては崩し乍らも、幾度も元の鞘にをさまらねばすまなかつた二人の腐れ縁も、遂に最後の破局が来たのであつた。そして私は、この二人の最初から、どこにどう行つても離るべからざる関係にあつたのであるが、この大団円の最後の破局に至つては、全然触れてゐず、その経緯も知らなかつたので、その噂を聞いた時も、幾度目かの事とて驚きもしなかつたが、一方が亜米利加へ渡つたとあつては、

「いよいよ二人の間も最後の断絶だな。」

と、しみじみ感慨を深うせざるを得なかつた次第である。

㈢ 後の事ども

この「縁」には、永代が美知代の隠れ家から之を奪ひ出すまでしか書いてないから、その美知代の妹とのラヴ・アッフェアは無論書かれてないし、この頃に至つては花袋氏も昔ほど美知代に対する新鮮な感じは持つてゐなかつたのであら

う。そこで私も是れ以上書く必要もないが、永代との家庭的交際は、その晩年に至つて更に深くなつたことであるから、序に、この後の事どもを記しておくこととする。

美知代と共に亜米利加に渡つた長男の太刀雄は病気の為に帰国し、永代がその世話を見てゐたが、間もなく死去したといふ報知が来た、生憎私はその時差支があつたので、妻を弔問にやつた。永代はその時荏原区の中延に居を構へてゐたが、私はまだそこを訪れた事がない。この太刀雄の七々忌の法要をするから目黒の雅叙園に来てくれといふ案内をうけたので、行つて見ると、「永代夫人」らしい婦人が見えてゐた。永代も一向これを私に紹介しないので、遂に此方も挨拶もせずに終つたが、この夫人は極めて家庭的の婦人で、永代はこの中延の居で伝書鳩を飼育し、全国的の聯盟まで作つて機関誌も発行してゐたが、その頃から私は屢々永代の居を訪れるやうになり、その度にこの新夫人が如何に忠実に、この我儘一ぱいに世の中を暮して行く永代に尽してゐるかといふことを観取せざるを得なかつた。

その中に大東亜戦争となり、空襲時代が近づいて来たが、永代の姪婿は航空本部勤務の中佐で、その話を聞いたのでもあるまいが、大分空襲恐怖症となり、邸内に堅固な壕を造つてゐた。

所が、この永代が陸軍病院に入院したといふ電報が来た、永代のかゝる病気といつたら胃癌に極つてゐる、と早合点して行つて見ると、意外にもチブスであつた。而も最初、近所の医師の手落ちで重態に一歩を進めたところへ、入院中警報が出て、かねて恐怖を感じてゐただけに、どうしても帰宅してわが家の壕に入るなどと云ひ出し、重症患者が寝台を飛び下りしたりしたので愈イケなくなり、遂に五十八歳を一期として、この文壇の名物男「蒲団」での田中、「縁」での馬橋は、病院の一隅ではかなく世を去つて了つた。

私は遺族と共に焼場に之を送り、遺骨を自宅に送り、その葬儀には、私は永代の最も旧い友人として委員長に推され、私も弔文を手向けた。

私は波瀾万畳の永代の一生を懐ふたびに、私自身の神戸から東京へかけての幾変化を極めた生活を想ひ出さざるを得ないのである。

昭和廿二年三月三日書了

中山生

「蒲団」後日譚

㈠ 旧悪？ 露見

「イーグル」時代であつたと思ふ、当時銀座随一の名物だつたカフエ・ライオンに永代が盛んに足を運んでゐたのであるが、或日私を捕へて、

「おい中山君、とんだ旧悪が露見しさうでヒヤ〳〵してゐるよ。」

といふ。話を聞いて見ると斯うだ。

私が初めて上京した暮の、押つまつた大晦日の夜、永代が宿なしとなつて私を訪ねて来たことは、前に記した通りであるが、実はその日、下宿で夕飯が出た時、「あすは元旦でも飯も食へない」と考へてその夕食を一杯ですませ、残りの飯を新聞紙に包んで机の下へ入れておいた、まではよかつたが、あたふたと出て行く時にそれを忘れて了つた。その不足腹を抱へて私を訪ねて来た訳であつたが、その事は、それから後も私に話したことがなかつた。

「所がね、僕が好きになつた娘がライオンに一人居るのだよ、そして其の親の家を聞いたら、どうだ僕が下宿してゐた家の隣りなのだ、残飯一条の旧悪が露見しはしないかとヒヤ〳〵してゐるのだ」

と、十数年昔の、飛んだ茶番狂言を初めて私にも自白したのであつた。

㈡　犬も喰はぬ——

夫婦喧嘩は犬も喰はぬと、よくいふが、果して然うでもなく、又然うでもある。

永代と美知代との生活は、殆ど夫婦喧嘩の連続とも云つてよい、これは二人の愛が熱烈でありすぎたのと、お互が我儘であり、そこへ女の方がいつも気位が高すぎたからであらう。そして此の喧嘩の仲裁役はいつも私であつたが、それが大破局の時も、小いさかひの時も大抵成功したことを思へば、必ずしも犬も喰はぬと捨てたものではない。

併し一度斯ういふことがあつた。牛込原町に於ける最初の新世帯当時——といつても赤ん坊が已に誕生すぎになつた頃の事であつたが、或る夜、二人は二階でドタバタと徹宵喧嘩して、その翌朝永代はプイと社に出かけて了つた。ついで美知代もよそ行きの仕度してから私に、

「中山さん、私もうつく〴〵愛想がつきたから別れるわ。」

といふ、いつもの威嚇宣言だと思ふから

「然うですか、それも好いでせう。」

と私は取あはなかつた。

「では左様なら」

と云つて出かけたが、午飯時に帰つて来た、それ見ろ、と多寡を括つてゐると、美知代は稍真剣になつて、

「私、赤ん坊をつれに帰つたの。お友達に相談したらね、子供を置いて来ては、思ひが残つて、とても別れられるものでないから、是非赤ん坊をつれてらつしゃいといふの」

で私は、

「そのお友達といふのは？」

「津田英学塾の同級生なの」

「所は」

「塾のすぐ近処。」
「名前は？」
「大森といふ煙草屋さんよ」
それだけ確かめておけば一応義務はすむ、今引とめたつて聞く女ではないからと、あとは放つておいた。
美知代は其儘赤ん坊を抱いて出て行つた。私は夕飯の仕度ごろには又帰つて来ると思つて多寡を括つてゐると、三時、四時、となつても帰つて来ない、遂に五時近くにもなつた。もう永代も帰つて来る時分だ、斯うして明かに家出を宣言して行つたのを、少しも引きとめなかつたことを考へると、永代に対して済まぬやうな気がしだして聊か狼狽した。こりや一応友人の義務として美知代をつれ戻さねばならぬと思つて、婆やには何も云はずに麹町に出かけて、塾の近処の、その大森といふ煙草屋を探したが、一向見あたらない。遂に尋ねあぐんで、警察署に行き、管内の煙草屋全部の名簿を探して貰つたが、大森といふ姓は一つもない、彼れこれする内、八時にもなつて、此方も腹がへる、これまで手を尽したら言ひ訳はあると思つて、原町の家に帰つたのは夜の九時であつた。
帰つて見ると、婆や一人で、永代も居ない。
「永代君はまだ帰らないのかい」
と聞くと、
「イエ、旦那様は夕方お帰りになりまして、奥様と縁日にお出かけになりました。」
僕は唖然として、あいた口が塞がらぬ。成る程、夫婦喧嘩は犬も喰はぬ——
あまりの馬鹿々々しさに、この事は、遂に二人には話さなかつた。

㈢ 三角形の因縁

これは三角関係ではないが、三角的の因縁話であり、多感の少女たりし美知代の一面を知る材料ともなるので、余譚として書いて見る。
二人の牛込原町時代、私がまだ二人の世帯の中に喰ひ込んでゐた時の事であるが、永代も私も不在中、松崎天民の妹が美知代を尋ねて来たことがある。たしか天民の妹も神戸女学院の出ではなかつたかと思ふが、今は市川由吉といふ国民新聞の記者、その頃横浜支局にゐたと思ふが、その市川の妻となつてゐた。その天民の妹たる細君が市川といふ大色魔に悩まされてゐることを、美知代に訴へに来たのであつたが、この市川と美知代との間に、危かりし一問題があつたのである。それは無論天民の妹の知つたことではない。市川由吉は、美知代が神戸女学院在学中、そこに教鞭を取つてゐた一クリスチャンであつたが、之が頗るつきの色魔であつたらしい。
この色魔に魅入られたのが美知代であつた。一方は純の純

なる少女、潑剌として濃艶な、文学趣味のある多感の少女としての美知代は、市川教授の目にとまらざるを得なかつた、それの怪しい行動が目につくやうになつたのに驚いて、之を極力擁護したのは、例の「マザー」であつたが、純真な少女の美知代にはそれが如何に恐るべき魔性であるか分らない。

「でも市川先生は家庭的にお気の毒なのですつて。」

と云つて妻子まである先生に同情をしたり、自分に与へられた歌に感傷を走らせたりした。

マザーは、由々しき大事として、美知代を強ひて病人にして寄宿舎に寝かせ、教室にも出さぬやうにして保護してゐると、或日その病人の美知代がフイと見えなくなつた。驚いてあちこち探しても見当らない、最う外に探す所はないので、もしやと思つて、平生、絶対に人の出入せぬ音楽室の三階に行つて見ると案の定、市川が美知代を引きつけてゐた。マザーはわざと知らぬ顔で、

「岡田さん、どうしたの、病人がそんなに出歩いてはいけないぢやありませんか」

といつて連れ出し、どうしてあんな所へ行つたかと聞くと、

「さつきお便所へ行きましたら、向うから先生が私を招かれます、私は先生の御眼を見たら、どうしてもからだがすくんで吸ひよせられるやうになりまして、ついフラ〳〵と行きました。」

といふ自白、色魔には眼に一種の動物電気があると聞いたが、大方そんな事で美知代が魅せられて了つたのだらうと、マザーが後に私に語つて聞かせた。

この市川は不評判となつて学院を辞し、たしか二人の子供のある細君を離別して、天民の妹を後妻に迎へ、これにも二人の子供が出来たのである。

其後の話であるが、神奈川県のある町で、牧師夫人の不倫問題があり、東京の各新聞は之を一様に報じたが、国民新聞は特に之を大きく取扱つて、最後に

其夫人も今は全く前非を後悔し、懺悔の生活に入つて只管謹慎してゐる云々

と非常に同情した記事にまとめてゐるのが、他紙の報道と異なるところであつた。

所が豈計らん、この記事を取りに行つたのが問題の市川由吉で、色魔の本性は此処にも発揮され、其夫人をつれて我家に帰り、現在二人の子もある妻の前も憚らず醜怪の地獄絵をひろげて了つた。

天民の妹たる市川夫人も愛想をつかし、昔の友美知代を訪ねて、その夫の乱行ぶりを訴へ、之が昔の学院の先生だつたかと、お互に泣いて貰ふつもりであつたが、美知代に取つて見れば、女学院時代に危くその罠にかゝりかけた事とて、思はず身ぶるひした事であらう。

それにしても此の美知代の大切な処女を保護し通したのは、我等のマザー、西山先生であつたが、この為に郷里の美

知代の母を呼びよせた時、母親は美知代に対しては一言も云はず、あくまで知らぬ顔で、あとで徐ろに学院の責任をじり〳〵と問うた落ちつききつた態度は実に立派であつたと、マザーも其の母をほめてゐた。

この事件あつて、美知代は女学院を中退した。故に卒業者とはいへないのである。

つけて云ふ、神戸女学院は、神戸諏訪山の下で、神戸一と云つてよい位の景勝の地を占め、日本に於ける最も古いミッションスクールであるが、大正時代に阪神沿線の大岡山の方に移転した。

㈣ 男二人が仲人

二人の同棲生活は、事実的には已に千葉県の海岸で初められたのであるが、とも角正式的に結婚生活を開始したのは、牛込の原町に新世帯を持つた時からであるから、本来なら之を機会に、たとひ友人の二三人だけでも招いて「式」らしいものを挙げて好い筈であるが、何しろ花袋氏との関係はまだ其儘だし、御当人同志が書生気分である上に、肝入の私がまだ二十五歳の独身者、そんな所に気はつかないので、イキナリずる〳〵べつたりの世帯持となつて了つた。併し、この儘で二人の存在を友人間にも知らさぬといふわけには行かないので、私と石島薇山といふ永代の友人の二人の名で、永代静雄、岡田美知代の両人が結婚して、牛込原町に居を構へたといふ印刷物を作り、少数者間に披露した。石島君は、私は会つたことがないが、武州行田の足袋問屋の息子、文学青年で、永代に是れまでも屢々学資を給した事がある。まだその頃は私同様独身者であつたらうと思ふが、然うすると、二人の男やもめが集つて、この文壇の名物夫婦の媒酌人となつた形である。

㈤ 新聞界のエポック・メーカー

永代は恐らく少年時代には「神童」として称へられたであらうと思ふ。私が神戸教会に入つて相知つた頃は十七八歳であつたか、まだ肩揚がありはせぬかと思ふ位の小作りの男であつたが、天性の雄弁で、美辞麗句はついで出で、文章を書かせても大人の域を凌いでゐた、この秀才を見込まれて、神戸教会が将来の牧師たらしむべく学資を扶助して同志社に送つたのであるが、この多感の青年は意外にも、一大恋愛事件に直面し、遂に負託に背いて文学青年として東都につつぱしるに至つた。その一生は殆ど美知代といふ女性に左右さるゝに至つたのであるが、その美知代といふ名を最初に紹介したのは、私である。別に取り立ててどうといつた訳ではないが、月明の夜、私から聞いた名――それが神戸女学院といふ、我等その頃の青年のあこがれの学校の出身であるといふやうな事にも一段の興味を感じて、文学雑誌上に其の居所をつきとめ、之と文書を交換したのが、二人の恋愛生活の一動機で

あつたとすると、私も大きな罪作りをしたやうにも感じ、又この二人の事件の為に花袋氏をして「蒲団」といふ名作を書かしめ、それが新興自然主義文学の先端を行くほどの文壇史的にも意義のある作であることを思へば、必ずしも私の無意識的悪戯ではないと、うぬぼれてもよいやうにも思ふのである。

余譚はさておき、若し永代が今少し生活が穏かで、新聞社といふゴミ〳〵した世界から離れ、落ちついて深く沈潜して行つたなら、屹度創作家となつても立派な位置にまで進んで行けたらうと思ふ。

若し又、新聞社に入つた以上、あれほど放縦な勤めぶりをやめて、少し神妙に、真面目にやつて行つたら、恐らく新聞界の大立者ともなり、押しも押されもせぬ輝かしい位置を占めたであらう。何しろ天才的の永代の頭では目前の、日々のつまらぬ仕事が馬鹿々々しく感ぜられ、我儘一杯に、奔馬の如く荒れ廻つたので、所謂鰻上り式の出世は出来なかつたのである。

併し永代は新聞界に取つては、一大エポック・メーカーとして、其功績を記してやらねばならぬ一大事実がある。それを誰も知らぬ。私は、この友人永代の為に、これを記録しておいてやらねばならぬ。

永代が毎夕新聞に入つたころは、世間では、此の新聞の存在を殆ど知らかつた、只米屋町と兜町との相場師だけが見る新聞で、どこ一つ読んで面白い新聞ではなかつた。

永代はこゝに入社して、先づ目についたのはその点であるから、何とかして之を面白く読める新聞にしたいと思つて画策した。いづれにしても「毎夕」といへば第二流第三流の新聞であるから、どんなに努力したところで、報道が迅速の、記事が正確なのといふことで競争は出来ない、よつてコケおどしでよいから、紙面を派手にして、せめて街頭で売れる新聞にしたい、それには何も他紙がやるやうに、あの記事、この記事を全部報道する要はない、つまらぬ種は捨てて、面白い材料だけ大きく扱へばよい——斯ういう方針で、紙面の品位も何も構はず、特種にはコケおどしの見出しをつけ、それをカギなりの大カットとして、四段ヌキ五段ヌキ、時には全段ぶつ通しの大見出しをつけて、紙面は大活字の乱舞となつた。

之は見事に当つて、夕刊新聞として街頭で著しく売れるに至つたが、この一大目論見は他紙の驚駭するところとなつた。現に伊藤博文公がハルビン駅頭で射殺されたといふ一大駭目事件でさへ、朝日新聞はやつと二段ヌキにした位であつた。然ういふ凝り固つた新聞編輯技法の中へ、毎夕新聞が斯かる気狂ひじみた事をしだしたのであるから、初めは各紙も其の馬鹿々々しさを笑つてゐたが、いつの間にか、それが激しい刺戟となつて、各紙もポツリ〳〵、二段ヌキ三段ヌキの見出しを作るやうになり、此に新聞紙面の編輯技術は一変す

るに至つた。

その先駆をなしたものは実は永代の創案であつた事を私は確信して、彼れが新聞界の一大エポックメーカーたることを罕記しておきたいと思ふのである。

永代の天才的才能は、彼の志望たりし文学方面よりも却つて実際的方面に伸長して行つた。彼が三四の社を転々して結局安定の地を得なかつたことは彼の「我儘」によることも多かつたが、畢竟は彼のハチ切つた才能が、コツ〳〵と一処に停滞することを許さなかつたからである。

斯して彼は遂に社を辞して、雑誌「新聞及新聞記者」を創刊して新聞そのもの、乃至独りよがりの記者に指導を与へ、更に「新聞研究所」を創設して、之も独りよがりの新聞界に一大驚醒を与へた。この事業は決して世間的には華々しくなかつたが、その存在の意義は頗る大きく、各紙、各記者を覚醒した功績は頗る大きかつた。これが未だ嘗て誰も手を染めなかつた尖端的の事業であつたのである。

併し彼は創案し、企画は立てるが、それを運営するに当つては、自ら陣頭に立つて遮二無二働くといふ気慨はなく、本性の「我儘」がすぐ出て、自分はなまけて了ふ。からだは十分ひまで、抱への車夫をおき乍らも、中々社へは出て来ない。此の癖が習性となつて荏原区へ移つてからも自宅に引込みきりで悠々小鳥の飼育を初めたのであるが、こゝでも亦例の創案癖が、伝書鳩の飼育から「大日本普鳩会」の創設となり、機関誌「普鳩」を刊行して此方面に亦一つの尖端を切り、斯界に雄飛するに至つた。この功績も決して小さくない。軍の潰滅は当然、この伝書鳩事業も衰微するに至つたではあらうが、永代は不幸空襲下に世を去つた。若し今日生きてゐたとて、此の事業の衰微には失望せず、又何か一つ新時代的のものを工夫したであらうが、惜しいことをしたと思ふ。

(六) 第三者

以上を以ても分る通り、永代は青少年時代から天才的の閃きがあり、それだけに、イヤにませた所はあつたが、花袋の「蒲団」に描かれたやうな、関西弁を使つて「おまえん」などといふやうな、そして見すぼらしい一介の貧乏書生たるに過ぎないやうな男では決してない。私はこの作を一読して頗る憤慨した。

当時隆文館から「新声」といふ文学雑誌を発行してゐたが、その編輯部に安成二郎君の兄、貞雄君がゐて、私に「蒲団」のモデル一件を書けと云つて来たので、私は永代の為にもと喜んで之を引うけ、この書の最初に書いたやうな経緯を述べると共に、花袋氏の描いた永代の為に大に弁じ、あれでは「花袋自身の恋敵」としても不足であらうとひやかしておいた。

何しろ「蒲団」が非常に騒がれた時であつたから「新声」は私の一文を大きく扱ひ、新聞広告には、これを一番大きな

活字で扱つて、私を「第三者、中山蕗峰」として掲げた（新聞にだけ）。

この「第三者」といふ言葉は、その少し前に世に出た国木田独歩の「第三者」が評判となり、一種の流行語となつてゐたので、早速それを利用して、私に「第三者」の肩書を勝手につけたのであるが、この為に「第三者」の言葉は更に流行し、近いところでは私の諢名ともなつた。

併し考へて見ると、この語は、永代と美知代とに於ける私を最もよく言ひあらはした言葉である。「第三者」は無論当事者ではないが、「アカの他人」ではない、事件に関聯のある「他人」である、すると、私は正に此の二人の立派な「第三者」であることを自認する。

筆写者注――右の文章が二二七頁一ぱいに書かれて一応終了した形をとる。そして二三四頁、二十四章（敏子の房州行を述べる部分）の上段に、また以下の文章が始まる。

美知代の房州行は前にも記したやうに、私の教へた策であつた。併し、それを南小田原町の私の家に相談に来るまでは、美知代が妊娠したことなど夢にも知らなかつた。その時初めてそれを知つて、事容易ならずとし、殊に此の女なら、思ひ迫つたら「死」をとりかねないと思つたから、一切を私にまかせよといつて、一時の雲がくれの策を授けたのである。そして愈美知代が小石川を引あげる時には荷造の手伝ひに岡田氏の所に行つたことはあるが、その前にも後にも、田山氏の家に訪問したことは一度もない、私が女を訪ねて花袋の家に何度も行つたやうに書いてあるのは全然虚構であるし、一旦、荷物の抜取り的持出の方法まで授けての後に、少しでも田山氏一家の者に秘密を覚られるやうな行動を取るほど、私もマヌけてはゐない。

美知代と打合せに行くどころか、その当時は自分の仕事の方が忙しくて、永代の下宿をすら訪ねたことはない。二人が房州に行つた後、十数日も経つてから、もう永代は帰つたか、首尾はどうかと気にかゝつたので、永代を訪問したところ、まだ帰つてゐない。ゐないが、何か用事があつて留守の部屋へ入つて一ッ時休んだ時、ふと机上に「女医者」といふ一冊子があつた、之は当時、女の生理的知識を極めて通俗に書いたものとて、非常に売れた本であるが、私はふとそれを開いて見て、妊娠に関する母体の異常などの項目にチョイ〳〵印がつけてあるのを見て、ハッとした。といふのは、美知代は私に一切を打あける時に、「この事――妊娠――は永代にも知らせてない、一切は自分一人で責任を負うて処置をつける」といつたその事がウソであつて、散々二人でいろいろな徴候などを研究して悩んでゐた事が解つたのである。あの、アケスケに大胆である美知代ですら、ウソをいふことが

あるのかなアと、一寸異様に感ぜざるを得なかつたのである。

筆写者注――次は二五三頁（二十五章）〃山田といふ男の友達が迎へに来た頃〃という本文の下に、

山田――之が僕、併し迎へに行つたりしたことはない、まだ私は花袋氏の宅を知らないのである。

筆写者注――次は二八一頁（二十九章）〃其下宿は牛込の山の手の〃の本文の上下に、

下宿は牛込区柳町三三多摩川館（相沢）、その二階の角の六畳にゐた。

この下宿多摩川館には教育講家の天野雉彦（徳川無声の伯父）氏も下宿したことがあり、永代の去つたあと、其部屋に私もしばらく下宿した。永代夫妻に家庭を持たせたのは、私のここへの下宿時代で、やがて私は永代の新家庭に同居することになつた。

筆写者注――次は二八三頁（二十九章）〃清は社の高い三階の編輯室で〃の本文の上に、

「社」は博文館、花袋は「文章世界」の主筆であつた。

筆写者注――次は二八八頁（二十九章）清が馬橋に会つた場面の上欄に、

永代静雄が「フォア・ランナー」を翻訳中といふ文芸消息が「よみうり抄」に出たので、花袋氏が、やつと永代の宿所をつきとめる手がかりを得たのであつた。

筆写者注――次は二九〇頁（二十九章）前の場面につづく二人の会話中の「旅行新聞」に関して、

「旅行新聞」は神田錦町河岸の印刷屋の二階を仮の根城として発行されてゐた。永代が之を主幹し、私も一度鴻の台行の紀行文などを書き、その中に永代と美知代が手を携へて遊んだことなどを織り込んで書いたことがある。間もなく廃刊して了つた。

筆写者注――次は二九四頁以下、清と山田との対面を描く三十章に書きこまれたもの。

（二九四頁）私と花袋氏との交渉はこれが最初であり、田山家を訪問したのも此の時が初めてであつて、その以前のことは皆事実でない。

（二九五頁）縞の羽織は着てゐたらうが、角帯など結んだことはない。

（二九九頁）本納といふ村の漁師の家の二階を借りてゐた。

（三〇〇頁）この海岸から帰つて、蕁痲疹か何かにかゝつたのか、非常にからだを痒がり、私と一緒に寝起きしながら、決してその肌を見せなかつた、銭湯にも何としても一緒に行

かなかつた。そして二ヶ月ばかり又草津かどこかへ療養に行つたと思ふ、その頃交換局としての私の仕事は相当面倒であつた。海岸から、山から、永代の手紙が来る、それを美知代へ送る、その返事が来る、又之を海岸へ、山へ、と送る、やゝこしいことであつた。

（三〇九頁）これが「余譚」にかいておいた、市川由吉のことであるが、私はそんなことまで、この時田山氏に話したかしら、スッカリ記憶を逸してゐる。

筆写者注――次は三一五頁（三十一章）清と馬橋、山田の会話の部分に、

「報知」ではない、「毎夕」である。

筆写者注――次は三五〇頁、三十四章冒頭の余白に、家の見取図を添えて、書いてある。

原町の最初の家はこんな間取りであつた。調馬の原つぱの側で、埃がすばらしくひどかつた。安成二郎と二人で此の家を見つけて本納から帰つた二人を落ちつけたのが大晦日の夜、年の市らしい暮の夜ふけの町で台所道具を求めてやつて下宿に帰つたのが元旦の夜あけ。その後俺も下宿を引払つて此の家にころげ込み、玄関の三畳に陣取り、敏子（美知代）は三畳の室でお産をした。

その後、二三軒隣りの二階のある家へ引越し、私はやはりそこの玄関を占領してゐた。

筆写者注――次は三五九頁（三十四章）〃年令が同じなので〃の下に、

同年ではない、美知代の方が二つ年上であつた。

筆写者注――次は、三十五章、敏子のお産を述べる部分で、

（三七二頁）産れた児は女であつた。名附親は私で、千鶴子とつけた。美知代の「ち」と静雄の「づ」とを取つて「ちづ子」としたので、二人も喜んで賛成した。この編には「静子」となつて出てゐる。後に「お寺」――太田玉茗の籍に入れられたのがこの女児である。

（三七三頁）湯は私が逸早く大家さんから釜を借りて来て沸しておいた。

永代が帰つたのは一時すぎだつたが、それと同時に私は寝て了つた、お産の事が少々ウス気味悪かつたからでもある。

（三七四頁）私が産婆に頼まれて腰をおしたなどと、とんでもないことだ、第一、産婆が子供一人生ませるのに、男の手を借りたりする馬鹿はあるまい。

筆写者注――次は四三四頁から四三六頁までの上段に、四十一章で馬橋が山田と別れることを清に告げる場面

について、

其の事実は兎も角も、永代が田山氏に斯う語つたその事は、事実であらう。永代としては、こんな事でも云はなければ、私と別れるに至つた体裁の好い口実は無かつたであらう。

それにしても、あれだけ注意して二人の間に介在してゐた私が、「栗の樹」の一件や「少女劇読みきかせ」の一件、お三輪さんの所へ立よつた一件位の事で、こんな事にならうとは思ひもかけぬことであつた。併し当時、生活に追はれ、創作にも自信を持ち得なかつた、永代の懊悩、焦燥、さう云つたとこへの美知代の薬の利かせ方が少々度をすぎて、私に対して斯ういふ風――前に記したやうに――に出て来るに至つた其の心裡も私には十分に読めるのである。只事実でないことを、永代の言だけを取つてこんな風に書かれて見ると、私としては腹も立つし、抗議もしたくなる。が、それも野暮であろう。そんな深刻な問題が事実あつたとしたら、私と永代とその死に至るまで、斯うした深交は結ばれなかつたであらう。

筆写者注――次は四十二章（四四九頁から四五三頁）のほぼ全体にわたつて、上と横の余白に、

この四谷の家は私は知らない。私が永代と別るゝやうになつて牛込原町の家を引あげてから間もなく此処へ移つたので、八九ヶ月ぶりに私が永代と白山の坂上で会し、私の下宿に一泊して帰つて、すぐ「小生は家庭を解散いたし候」といふハガキをよこした、その事件の家が此の四谷の家であつた。

この「縁」の篇末は、永代が再び美知代を奪ひ出したまでであるが、二人はそれから都落ちをし、又東京に舞ひ戻つて、東中野（前の柏木駅前）に家を構へるやうになつてから、私はそこへ始終尋ねて行つた、そこで永代が第二のラヴ・アッフェアを醸し出し、相手が美知代の妹であつただけに、更に二人の衝突は深刻になつて、又も「家庭解散」となつたのである。

その柏木の家で一夕スキヤキの振舞をうけ、三人で鍋をつゝきあつた時の美知代の思ひ出話であつた――

「あなたが本郷へお移りになつてからね、永代はハガキ一本も差上げないし、四谷へ移つても御知らせしないし、私から随分云つたのですけど、バツが悪いのでせう、どうしても筆をとらないのですよ。所がね、或日、安成二郎さんがお見えになつたので、松茸でスキヤキをし乍ら、あなたのお話が出たので、私又、お便りの事を云つたらね、どうでせう、この人ムキにおこり出して、押入の行李など庭先へ放り出して「何だ君は。君は中山君と結婚したまへッ」ですつて。所が二郎さんたら、その喧嘩の間、たゞの一口仲裁もせず、一人で肉と松茸をムシヤ〳〵たべ乍らニヤリ〳〵笑つてゐて、どうでせう、そのあとで「今の白いものは、アリヤ大根かい？」ですつて。おどろいちまいました

よ、大根と松茸と分らないつて、食へども味ひを知らずつて、あんなのあきれて了ひますわ」
永代も当時を思ひ出してニヤリ〳〵笑つてゐた。
お国さんは水野仙子である。花袋の主宰してゐた博文館の「文章世界」に「徒労」といふ単篇小説を投じてから一躍評判になり、間もなく上京して花袋の弟子となつた。美知代が「家庭解散」をやつて花袋氏の懐ろに再び帰つて行つた時、花袋氏は二人で近郊に世帯を持たせた。それが美知代の隠れ家であつた。

筆写者注――次は五一九頁（五十一章）〃お国さんの故郷に近いある温泉場〃の上に、
飯坂温泉である、美知代からその時の消息をよせて来たことがあつた。

以上、内容的に重複するものもあるが、主なところを写した。

あとがき

右の筆者の経歴は一部文中に書かれているが、中途の省略部分と、嗣子中山氏の与えられたメモとにより、略歴をしておくことは、わたくしの義務かと思う。
中山三郎は、明治十七年三月二十七日、島根県津和野に於て、士族斉藤某の子として生れ、同じく士族中山某の養子となった（本文中、角帯にこだわったのはこの辺りに理由がある）。両家とも貧に窮しており、遂に活路を求めて、三郎十七歳の年、養母、実弟妹らと共に津和野を離れ、神戸へ出た。初め県庁に勤めたが間もなく神戸教会へ入り〃生涯忘るることの出来ぬ精神的慰安〃（中山）を得たが、明治三十八年には上京。この辺は中山自らの語るところに任せる。大震災後、出版業が軌道に乗り、日本文学大系、校註国歌大系、近代文学大系、明治編年史等を出した。その頃、文楽の人形遣い吉田文五郎を贔屓にして、桐竹紋十郎と二人の後援会を起し、東京へ文楽を招くこと、義太夫節以外の音曲に人形を合せることを計画し、かなり成功して回数を重ねたという。そして「文五郎芸談」をもまとめた。戦後はのんびりと質素に暮し、小川菊松著「出版興亡五十年史」のゴースト・ライターをつとめたりして、昭和三十三年十二月二十五日、肺炎で亡くなった。
この中山三郎（泰昌）はわたくしの外祖父である。生涯文学を捨て切ることはできなかったらしく、俳句、和歌、随想などは書きつけていた。自分の一生を雑草に喩えて書きたいと言っていたが、果せなかったらしい。その一部分と考えてよい右の文章を公にできたことを、祖父は喜んでいるかもしれない。大幅の紙数を与えられたことに御礼申し上げたい。

（一九八〇年一月二四日）